

日本橋・江戸っ子・川柳二五〇年

尾藤一泉 川柳家

ふる雪の白きをみせぬ日本橋

宝暦七年（一七五七）八月二十五日、初代川柳評のさいしよの入選句に選ばれた一句は、五街道の起点、言い方を変えれば、当時の江戸幕府を中心とする日本という国家の地理的基点を描いたものだった。

今日では、高速道路が空を蔽い、やや息苦しさを感じさせるが、昼時にもなると多くの人々や車が往来し、巻頭句の前句「賑やかなこと賑やかなこと」を彷彿とさせる。また、橋の側面のアーチ型石組みや欄干照明の装飾は、道路基点としての風格も見て取ることが出来る。

さて、川柳がブームである。平成改元と時を合わせてブレイクした（サラリーマン川柳）の影響も大きい。二〇〇七年、そのさいしよの入選句が発表されてから二五〇年の節目を祝う（川柳二五〇年）行事が全国的に行われて以来、テレビ番組にも目に見えて川柳が扱われるようになった。プロデューサー曰く「川柳を取り上げると視聴率が上がる……」とは我々川柳家にとって嬉しい現象だが、残念ながら彼らが扱おうとしているのは、川柳の表面的可笑しさやオチの面白さであった。彼らには川柳に愛情や誇りをもって取上げてくれているのではなく、単に視聴率の「道具」として使っているだけのようなのである。そこには、江戸の伝統も江戸っ子のおいも無い。

江戸は開府以来、上方や諸国から取り寄せた文化で成り立ってきた。明暦の大火で一度焼け野原となり復興。さらに百年もたつと「大江戸」と呼ばれる世界有数の百万都市へと成熟し、江戸独特の文化が醸成されるようになる。錦絵、浮世絵、黄表紙、洒落本などは江戸で生れ育ったもの。ちょうど同じ時期、川柳も江戸という大都市で産声をあげた。

川柳が、同じ形式の俳句に比べて人間を直接テーマとしてきたのは、地平線から日が上るのではなく、江戸では連なる軒から日が上り、月が沈むのも軒へ。朝起きて戸を開ければ、密集した町には人・人・人。この大都市の人間生活や風俗、人間の心理などの面白さを描き出してきたのが川柳だった。

江戸者の生まれぞこない金をため
は、江戸出身者をさすコトバだが、江戸生れのアイデンティティーは、川柳の隆盛時期と重なって定着し

た。今日の「江戸っ子」という概念も、この時期に形成され、「江戸っ子」を文献で遡ると、明和八年（一七七二）八月二十五日に川柳評の勝句（入選句）となった。

江戸っ子の草鞋を履くらんがしき
という句に行きつく。つまり、江戸っ子の初出を探すと、今のところ川柳作品が最初ということになっている。なんだか、江戸生れの文芸である川柳が、「江戸っ子」の初出だなんて言われると、それだけでも鼻が高い。

かくいう私も、江戸・東京で生れ育った五代目。べらんめいの江戸訛りからは遠くなくなってしまったが、育越しの金は持たない（正確には……持てない……か）という江戸っ子で地を生きている。

江戸っ子といえば、浅草に住む日さんも生粋だろう。（川柳二五〇年）を社会に発信しよう準備をはじめた時に初めて出遭ったが、自分の為より他人の歓ぶ顔がみたく、また川柳をはじめ祭など江戸の文化には熱い愛情と誇りをもっている。祭囃子が聞こえてくると、じつとしていられないのも似ている。ついでに商売っ気には奥手で、金儲けに縁がないところもよく似ている。

そんな二人が、江戸発祥の川柳の二百五十年の節目を祝おうと呼びかけた。その成果が、川柳ブームの一翼を担ったのは、何と言っても痛快だが、特に、初代川柳が住んだ浅草周辺では、地域の人々が地元発祥の文化に目覚め、「川柳横丁」なる公式名称を申請、公式に区道の名称として登録されたことは、さらに嬉しい。



その後、日さんは商売がらみの事情で大きなビルを手放し老後をマンション住まいと決めこんだが、その住まいの地に選んだところは、初代川柳の墓所がある天台宗龍宝寺のすぐ近く。愛する川柳という文化の色濃い場所である。江戸っ子にとって損得なんてたいした問題ではなく、日さんも江戸っ子を地で生きている。

さて、川柳が、俳句と同様の十七音で鑑賞される文芸的特長が成立するのは、明和二年（一七六五）に『諷風多留』初篇が刊行されたことをもって基点とする。すなわち、来る二〇一五年には、川柳の（文芸発祥二五〇年）という大きな節目を迎えることになる。

和歌千年、俳句五百年に比べたら、まだまだ若い文芸であり、その存在もちっぽけであるが、江戸という世界に冠たる都市文化の一つとして生まれた川柳を愛し誇りにも思っている。

私たちは、文芸としての川柳が確立して二五〇年の節目である二〇一五年には、川柳がさいしよの入選句として選んだ巻頭の一句を、将来高速道路が取り払われ空を取り戻すであろう日本橋の柱に句碑として建立したいと密かに願っている。

それは、江戸っ子にとって日本橋という場所が、単なる日本の地理的

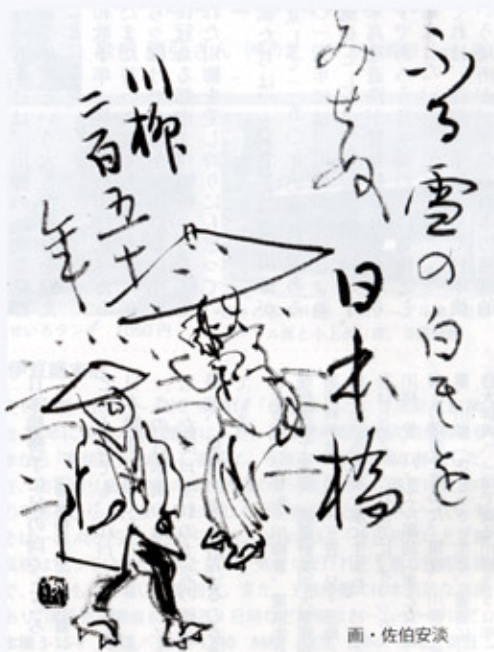
基点としてばかりでなく、江戸っ子の心の基点として存在するからである。

日本橋勝手に足の向くところ
『諷風多留』十五篇（安永9）

という句でも、江戸っ子にとっての日本橋観が伺える。

この日本橋の地に江戸っ子の心をもった江戸生れの文芸の碑が、近い将来、東京の陽を浴びるのを夢に見ている。

びとう・いつせん 川柳家、東京生れ、東京理科大学工学部、武蔵野美術大学短期大学部美術科卒業。祖父・三笠、父・三柳ともに川柳家という川柳一家に生まれ、15歳より川柳をはじめ。これまでに、オリックス「マネー川柳」や、バイエル薬品「男と女のフォト川柳」の選者を務めた。現在、川柳学会専務理事。川柳「さくらぎ」主宰。著書に『川柳総合大辞典』、『目で語る川柳250年』など。



画・佐伯安淡



『諷風多留』 十一篇（安永9）